

# My 湖北スタイル

～移り住むなら滋賀県湖北～

M Y K O H O K U S T Y L E

- 刊行物：「My 湖北スタイル～移り住むなら滋賀県湖北～」  
滋賀移住ライフスタイル情報発信事業（湖北地域）
- 刊行年月日：平成26年（2014年）3月
- 主管課名：滋賀県総務部市町振興課
- 所在地：大津市京町四丁目1番1号
- 電話番号：077-528-3231
- FAX番号：077-528-4820
- 電子メール：bh00@pref.shiga.lg.jp
- 企画制作：いざない湖北定住センター
- 印刷：株式会社アクト

※この冊子の著作権は滋賀県が有し、滋賀県の許可なく、  
無断で複製、二次使用する行為、またはこれに類する行為を禁じます。

# My湖北スタイル

～移り住むなら滋賀県湖北～

## 目次

INDEX

21 19 17 15 11 9 3

### 新・湖北びと 移住者のライフスタイル紹介

びわ湖と森林に魅せられて 橋本勘さん  
地域が健康になるために 中谷努さん  
地域で助け、助けられて生きる 柳生のびさん・麻里さん  
水音を感じ創作活動をする 石原淳宏さん  
地方都市で暮らす豊かさ探求中 竹村光雄さん・美穂さん

### 本多ファミリーの田舎暮らし体験 リポート

### 湖北によろこそ！ ネイティブ湖北びとの声

集落に自信と誇りを 川西章則さん  
地域の自立性を高めるために 藤田博さん  
生活環境をデザインする 佐野元昭さん

### 湖北スケッチ フォトギャラリー

### むすぶ大学×まち

地域資源としての茅葺き民家の活用に向けて 滋賀県立大学・濱崎一志教授  
長浜に根付かせたい学生たちの活動 長浜バイオ大学・松島三兒教授

### 田舎暮らしを応援 お仕事・就農・各種相談窓口一覧

### 湖北へのアクセス

# びわ湖と森林に魅せられて

橋本 勘さん（長浜市西浅井町山門・平成21年移住）



湖北の最北部に山門水源の森がある。

ブナ、アカガシ、スギなど多様な木々の森が広がり、その中央には湿原がある。貴重な植物などを保全するため「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」の人たちが、ボランティアで地道な活動を続けている。

橋本勘さんは、西浅井地区の森林を守る森林レンジャーの仕事をしている。活動の範囲は山門水源の森をはじめ、集福寺の集落の東に広がるブナ林や奥琵琶湖の湖岸に連なる桜並木、深坂峠を越える塩津海道の森など。



橋本さんの出身は大阪府堺市。滋賀大学教育学部を卒業後、新潟大学大学院で学び、大阪に戻り特許事務所に勤めた。そんな時、青森のリンゴ農家、木村秋則さんの話を聴く機会があり、苦難の末に無農薬でリンゴ栽培を成功させた話に「心が動いた」という。探究心と信念を持つ、木村さんの考えや自信溢れる行動力に感化され、自分とは違う価値感に触れた。

その後、ご自身も新しい目的を求めて、長浜市小谷上山田町の「どっぽ村」を訪ねた。そこで、山門にある実家を拠点にして、新しい仕事を探すことを



勧められた。

ボランティアとして水源の森に通い、森の整備や植物の保全活動、バトロールや調査を手伝うようになった。

その活動が、現在の森林レンジャーとしての仕事に結びついている。

現在、3反5畝の農地で米を作りながら、自然体で山門の暮らしを楽しんでいる。湖北の自然が作るライフスタイルに沿うように…。



# 地域が健康になるために

中谷 努さん（長浜市余呉町中之郷・平成24年移住）

大阪府枚方市から親戚が住む余呉町に移住して2年。一軒家を改修し、鍼灸院を開業した。

子どもの頃から夏休みには遊びに来る、自然の中でサワガニを捕まえたり、お正月には餅つきをした思い出の場所だった。屋根の雪降ろしや草刈りの手伝いなどもし、余呉は第二の故郷だったという。

自分自身の職場での存在価値や情熱の在り方など、納得した仕事をするために、会社員を辞め、鍼灸師の資格を取得後、余呉町への移住を決意した。食べる物に困らない最低限の暮らしと、健康で趣味が持てる環境なら、世



界中どこでも生きていける。

「鍼灸の知識や技術は世界中どこでも通用すると思います。地方ではそんな理想の暮らしは成立しないのかと、自らが実験台になり挑戦しています」と中谷さん。

確かに、田舎では都会と比べて働く場所が少ない。起業するにも人口の多い都会の方が有利だ。しかし、たくましい反骨精神でそんなセオリーを吹き飛ばし、田舎でも充分に仕事と生活を成立させたいと考えている。

「尊敬する先生の院はお灸のヤニで壁や本棚の本が茶色に燻されています。たくさんの患者さんを治療してきた証拠。僕も、この新しい真っ白な施術室の壁を、患者さんの治療をするこ



とで茶色になることが夢です」と話す。読書が好きで、食養生や農業の知識もあり、土作りの一環として、家の周りの空地に色々な野菜の種を蒔き、土と野菜の成長の相性の実験などもしている。また、猿やイノシシなどの獣害に対しても我流で試み、楽しんでる。

この地域に暮らす人の健康づくりを目指しながら、自分の存在価値や情熱を毎日確認できること。

「これが僕の理想の田舎暮らしです」



# 地域で助け、助けられて生きる

柳生のびさん(米原市曲谷・平成24年移住)  
麻里さん(平成23年移住)

をちゃんと見つめて、真剣に生きよう。」そんなことを考えるようになったという、のびさん。

近所の90歳を超えたおばあちゃんと仲良し。分らないことはなんでも教えてくれて頭が上がらない、と楽しそうに語る。地元の人たちは親切で、「僕たちが困って助けてほしいそうにしていると、言わなくても助けてくれる。でも、必要以上には干渉してこない。それが本当にありがたい」とのびさん。



## 自分のベースは田舎

「まちでは、常に雑踏の中にいて、ちょっとした雰囲気にもぎれて、なんとなく生きていた気がします。自分に嘘をつき、ごまかしやすかった」

ひと言ずつかみしめるように語る、柳生のびさん。

アトピー性ぜんそくや食物アレルギーなどがあり、病弱な子どもだったの

を心配した両親が、環境が変われば改善するかもしれないと決心、家族で一時的に田舎へ移住したところ、体調はすっかり回復。その後、父の転勤や自身の進学のため再び都会へ戻ることになったが、心の奥底には、「自分のベースは田舎」という想いをずっと抱えていたという。

社会に出てからは、不登校相談員として子どもたちの面倒をみたり、キャンプインストラクター、野外救命士などの資格を取得。そんな頃に出会ったのが、米原市の地域おこし協力隊「みらいつくり隊」の募集。自然の中で子どもたちと関わる活動をライフワークにしたいと思い始めていたのびさんは、迷わず応募。二期生として、過疎高齢化の進む姉川上流・奥伊吹の米原市曲谷へ移住することになった。

## 自分に向き合い、人に助けられ

「夜。みんなが寝静まった『音の無い』暗闇。最初はそれが辛かったけれど、少しずつ自分の中でごまかしていたことや、あやふやだったことが鮮明に見えてきました。自分の考え方や生き方



## 伊吹の魅力を発信したい

「まちおこしという名目で来ましたが、本当は、助けてもらっているのは、私達のほうなんです」というのは、みらいつくり隊一期生の麻里さんだ。「食」への関心が高く、体に安心安全な食べ物を畑で作る自給自足の暮らしに憧れて、京都から移住した。

この地で自分にできることは何か、と考えた麻里さんが発案、のびさんも実行委員として力を入れているのが、まちおこしイベント「伊吹の天窓」。

「この地には、豊かな自然や文化、食など、素晴らしいものがいっぱいあります。地元ですつといると見過ごしてしまうかもしれないけど、他所から来た私達だから気がつく、そんな魅力を、若い人の目線と発想で発信したい」と



企画した。当初は「そんなものでこの奥地にわざわざ人が来てくれるの？」と、まわりは半信半疑で理解を得るのが大変だったという。しかし手作りのイベントは若い人を中心に大反響。協力してくれる人の輪も広がり、3年を経た今では、県内外から多くの人々が訪れる伊吹の夏の風物詩ともなっている。「ひとりひとりの力は小さいけれど、心通わせる仲間が集まれば、大きな力になる」この地で暮らすことに、確かな手ごたえを感じ始めている。

## 田舎の時間の流れが心地よい

みらいつくり隊として、東草野まちづくり懇話会の事務局で多岐にわたる仕事をしながら、田舎で自分自身の未来をつくるために試行錯誤していた二人は、生きていく上で大切にしたいと思う部分が共通であることに気づき、自然に互いを生涯の伴侶と思うようになった。

時間はたつぷりある。互いの顔を見ながら話をよく聞き、よく話す。見よう見まねで野菜や米作りにも挑戦中だ。「不慣れと言われるけれど、私達にはそれがちょうどよく、心地よいんです」「これで、曲谷の一員になれた気がします」

田舎の「時間の流れかた」にもすっかり馴染んできた、とにっこりほほ笑む二人だった。



## コラム 「重要文化的景観地区」に東草野の山村

米原市の姉川最上流域は、「東草野の山村」として国の重要文化的景観に選定されています。この制度は、暮らしのなかで長い年月をかけて形づくられてきた文化的な景観のうち、特に魅力ある景観を文化庁が選定するものです。東草野地域には、奥から甲津原、曲谷、甲賀、吉槻という4つの集落があり、まちづくり懇話会が移住交流などの事業を展開しているほか、集落の再生を応援する「みらいつくり隊」も多彩な活動を続けてきました。この選定をステップにして、東草野をより魅力ある地域に、という仲間たちの移住が期待されています。

# 水音を感じ創作活動をする

石原 淳宏さん(長浜市木之本町小山・平成25年移住)



を学ぶために、ネパールでボランティア活動も行った。その間、インドのムンバイにあるレコード会社と契約し、インド国内でCD2枚もリリースした。その後、田舎暮らしは、長野を経て、天竜、高野山、尾鷲、相模原と続き、現在の長浜市木之本町小山にたどり着いた。

きっかけは、湖北みずどりステーションにはられていた「田舎暮らしフェスタ」のポスター。フェスタ当日、いざない湖北定住センターに移住に関する相談をして、即、利用会員に登録したという。その後、当センターの空き家バンク制度を使って住まいを探し、現在の古民家を気に入って移住した。

山里の水路を流れる豊かな水の音を聞きながら、美しい湖北の自然から多くの刺激や癒しを感じ、新しい創作意欲と共に、素晴らしい田舎暮らしを満喫している。



石原さんはインド楽器シタールの演奏家。初めてシタールに出会ったのは大学2年生のとき。東京でインドの民族音楽のライブを聴き、シタールの音色に心を奪われた。

最初に田舎暮らしをしたのは、長野県南部の山間の小さな村。田植えや稲刈り、リンゴの収穫などに取り組む。シタールの演奏活動も続けながら、地元の方々たちと交流し、山間部の文化



# 地方都市で暮らす豊かさ探求中

竹村 光雄さん・美穂さん  
(長浜市元浜町・平成25年移住)

果物や野菜を頂いたりする体験は、とても新鮮で、田舎暮らしならではの魅力！と楽しそうに話す。

して、平成25年7月、長浜まちづくり株式会社就職し、美穂さんと共に移住した。

現在、長浜駅前の整備計画に携わる一方、地元の方々たちで結成されたまちづくりのグループに参加し、新しい暮らし方の提案を試みている。

「地方都市で暮らす豊かさが何かを探求し、ひとつひとつカタチにしていきたいです」と竹村さん。

例えば、奥びわ湖の隠れ里菅浦を歩きながら、村の人の話に耳を傾ける、雪の賤ヶ岳でトレッキングを楽しむ。そんな身近にある素材で魅力的なことに光をあて、みんなの楽しみのきっかけづくりができないものかと、ワークシヨップを重ねている。

また、もうひとつの活動は町なかの空き家の活用。長浜の町を商業目的だけでなく、生活の場として再生させることが目的だ。

休日は美穂さんと2人で、趣味である自転車で美しい田園風景の中を走っている。山里で初めて出会った人から、「こんにちは」と声をかけられたり、



本多ファミリーの  
田舎暮らし体験  
レポート

IN 「さきち」木之本杉野

本多ファミリーとお友達のご家族が  
1泊2日の田舎暮らし体験に行ってきました♪

まずは田舎裏を囲んでいっく



何ができるか  
楽しみ楽しみ♡

田舎暮らし体験住宅の  
「さきち」は、築150年の  
余呉型民家です。



さばそうめん!!!  
できた～!



ご予約など  
お問い合わせは  
P19をご覧ください。

さきちに到着ー!

1日目

女将の松本真奈美さん、  
お世話になりました。



長治庵でごはん



長治庵  
創業260年の茅葺きの宿。  
田舎裏のある母屋では、山  
菜やキノコ料理など山の幸  
を堪能できます。

先生は、  
湖北御食事文化研究会の  
肥田文子さんです!

地元の方に  
地元の食材を使った  
郷土料理を教えてくださいました。



料理教室に参加



近くをお散歩

この風景に  
いやされます...



近くの農園におじゃまして  
収穫体験をさせていただきました。



大きなおいも  
よいしょよいしょ!  
たーくさんとれたよー!!!

いも堀り体験

また来ようねー  
住みたいねー



2日目



田舎ってなんだか  
なつかしくて  
落ち着くよね。

縁側で日なたぼっこ  
こんなにのんびりゆっくりしたの  
久しぶりー!



ご近所さんから  
お野菜もらったよー



地元の山菜やお魚がおいしい!  
なんといっても  
余呉のお米の炊き立てごはんは  
何回もおかわり～!